

## 生きている

第 13 期大学院生 廖 舒忻

卒業エッセイに何を書こうかなと悩みながら、過去の先輩たちのエッセイを拝読しました。面白い発見ですが、先輩の方々は皆、面白くて意味深い言葉をテーマにしたようです。ああ、私も面白いテーマを考えないと負けちゃうなと思いながら、頭の中で、日本語を必死に考えてきました。その結果、「生きている」という言葉が、突然頭の中に響きました。そして、以前お会いした時に、死にそうな私の顔を見て心配したのでしょうか、春休みの頃に、「ジョキン、まだ生きていますね」とは言いつつ、やはり心配そうな顔をしていた第 7 期 OG の菊盛さんの姿が、その言葉の響きと共に、頭の中に浮かんできました。

それは、去年私が退院してから菊盛さんと再会したときに、菊盛さんがかけてくださった言葉でした。その話を聞いて私は一瞬、ぼうっとしてしまいました。

私は去年まで、20 数年の人生のなかで、異国で倒れて入院するなんてことを、1 度も考えてはきませんでした。そのためか、退院してからの最初の 2 ヶ月間、私は、修論も就活も何もせずに変なことばかり考えながら過ごしました。例えば、「なんでこんなことになってしまったのだろう」、「なんでそこまで頑張らないといけないのだろう」、さらに、「そもそも、なんで留学に来たのだろう」というようなことを、毎日数時間かけて考え込んでしまいました。そして、そのようなメンタルの不調は、春学期のはじめまで続きました。

しかし、上記の通り、菊盛さんと再会したときに「まだ生きていますね」と言われてから、「そうだ、私はまだ生きているのだ！」と、私はやっと自分が死にかけたことから生き返ったことを実感しました。また、その一言のおかげからか、「せっかく生き返ったのに、頑張るとまた死にかけるかもと思い込んで何もできない日々は、死んでいるのと変わらないのではないか」と思い始めました。そうして、動揺していた心を整え、論文執筆を再開しました。

本日、修士論文が無事提出できた瞬間、私は退院した頃に自分が考え込んだ問いをもう 1 度思い出しました。しかし、今度は答えを見つけました。全ての答えは、今まさに生きている私の中にあります。製本された修士論文の中にあります。この 3 年間の思い出にあります。

そうです、私はまだ生きています。これからも、負けずに生きていきたいと思っています。